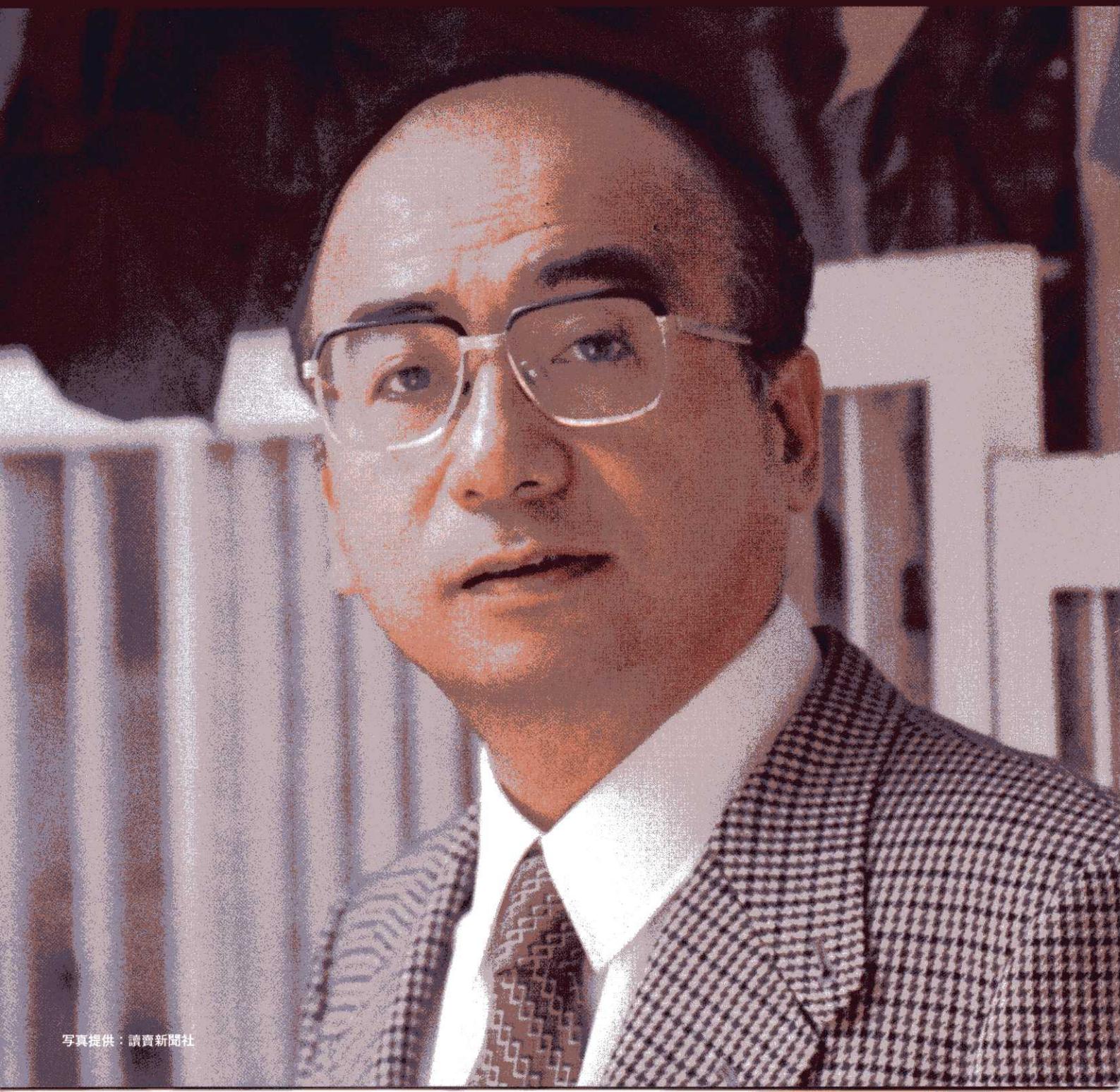


西尾幹二全集

全22巻

国書刊行会

全著作を収めた
初の決定版全集



私は子供の頃詩人になりたいと思っていた。まさか「政論家」になるとは思つてもいなかつた。

若い頃自分は語学の天才だと思つていたが、そうでないことに気がつくのに時間はかからなかつた。

若い頃小説家になることを早々と断念し、文芸評論家に転じ、新聞の時評家までつとめたが、根が小説好きの人間ではないことを悟り、文壇を離れた。小説には描写がつきものだが、そこが私には退屈なのである。哲学は好きだが、哲学的人間でもやはりない。政治的自由も宗教的自由も理解できるが、私に腕を上げる「自由」はあるのか否か、それとも私の行為は予め決定されているのか、といった問題には関心もないし、理解もできない。

私は言葉が人生の核心に向かう簡潔な表現を好んだ。セネカやモンテニュやヴォーブナルグやベーコンやアランが好きだった。カントやヘーゲルへの探究心は途中で捨てた。二一チエは隅々まで分るが、ハイデッガーは分らない。私は孔子よりも韓非子が好きである。

二一チエ論を除いて、私は作家論や評伝作品をついに残していない。志していた福田恒存論も十分に展開しきれていない。私は他人の人生に自分を仮託するのがへたなのである。

代わりに、私の書くものはことごとく自分の体験に基く自己物語である。ドイツ留学を皮切りに、ソ連文学官僚との思想対話や西ドイツの学校めぐり、中教審委員や歴史教科書の会の会長時代の体験記、戦争と疎開世代である私の幼少年物語、はては自分のガン体験に至るまで、「私」が主題でないものはない。その頂点に恐らくあるのはペルリンの壁が落ちた一年後の東ヨーロッパ探

訪記である。ここでは詩人や哲学者など言葉を扱う人だけを相手に長編対談を繰り広げた。私は自由を知りたかった。世界の運命を知りたかった。その後の私の評論を規定し、動かしている。

人は私が自分の体験の告白に執着しうまが、私が小説作家についてはいるというだらうか。私は小説家ではないが、私小説作家に転じ、新聞の時評家までつとめたが、根が小説好きの人間ではないことを悟り、文壇を離れた。小説には描写がつきものだが、そこが私には退屈なのである。哲学は好きだが、哲学的人間でもやはりない。政治的自由も宗教的自由も理解できるが、私に腕を上げる「自由」はあるのか否か、それとも私の行為は予め決定されているのか、といった問題には関心もないし、理解もできない。

私は学者の道に入り、当然本格的な専門家に憧れていた。あるとき国語学者橋本進吉とその弟子たちの仕事に触れて、強い羨望の念に捉えられた。そして外国文学研究は学問にならないという——以前から分っていたが——余りに自明な矛盾を再認識した。

それでいて、専門学者と称する人で目の前の政治現実に余りに無知な人が多いのを見えて、確かに彼らの「知」を怪しんだ。例えばプラトンを学ぶ研究家はプラトンが自己をとり巻く当時の世界を眺めたように、現代の世界を眺めるのではなく、プラトンは世界についてどう言つていたかの知識を得るだけで満足している。これはおかしい、と喝破した田中美知太郎に私は敬意を抱いた。

歴史の学問がどんなに専門化され、細分化されても、学者たちは今ではその中の何ひとつをもじつは信じていない。ただ過去の人がそう考へ、そう信じていたという知識を集めただけであり、調査がなされるだけである。

私の最初の研究論文は「二一チエと学問」だつた。そして『悲劇の誕生』を翻訳した。人生の入口で自分で誓約した言葉がある。大切なのは知識ではなく体験、認識ではな

く行為である、と。

『悲劇の誕生』が『国民の歴史』の基調底音をなしていると指摘してくれた一般読者の方がいて、自分でも気がつかないことゆえ驚いたが、初期論文「二一チエと学問」が『江戸のダイナミズム』に真直ぐにつながっていることは間違いない。

よく若い頃から貴方は機軸のぶれない人だと主として政治的なことでいわれてきた。有難い評価とは思つてゐる。しかし世間は誤解している。私は思想上のどんな確固たる立場も持たない。私には立場を疑う立場があるだけである。私はつねに否定で語ってきた。当然自分自身をも否定してきた。

私は同じことを二度書かないのが秘かなプライドである。マスコミで生きるために厳密には守れなくなるが、精神は同じ段階を二度登りたがらないものだ、という古人の言葉を肝に銘じてゐる。

私は理想家といわれるよりも現実家といわれるほうが嬉しい。理想家はたいていの場合空想家の別名だからである。私は自分の中の空想を疑い、忌避することに情熱を注いできた積りである。

若い頃自分の才能の特性を定める尺度に、

エステート（審美家）かモラリストかという物指しがあつた。友人たちとの議論によく出て来た。政治的に左か右かの区別ではない。エステートに古井由吉や丸谷才一、モラリストに小田実や大江健三郎がいるといえば政治的区別でないことは分るだろう。私はモラリストの側であった。モラリストの価値観は人生に対する「態度」である。

私は両親から愛された人間である。ことは母の愛は大きい。小学校の先生からも愛されたほうで、今でも一人の恩師との交流がつづいている。中学、高校、大学と年をとるにつれて、教師は私を愛さなくなつた。私の文業を最も育てくれたのは文芸誌『新潮』である。

私の仕事には未完結のものがかなりある。まだ人生は終わらない。今後の仕事の計画表をある編集者に見せたら、先生は二百歳まで生きるつもりですかと揶揄された。

私も若い頃から彼をさんざん批判してきたのだからまあ仕方がない。

すべては戦争觀が同世代を迷走させていた。他方、戦争に余りにも近い世代は国家と戦争との関係に冷静な距離感を持つこと

ができるのだ。大岡昇平も司馬遼太郎も兵士だった。彼らは自らの体験で躊躇している。

余りにも戦争から遠い世代はこれまで共感という大切な歴史感覚を持つていない。

戦争と國家の関係を的確に語ることができるもの少ない一人に私は入る、と秘かに考えている。

私はそもそも人間に自由はないというよ

うなことを書きづけってきたが、私ほど自由な人間はいなかつた。理科系単科大学に務めていたのは幸運で、教授の誰もが私のマスコミ発言に興味がなく、工学部系学生運動家たちは学内に私を弾劾する立看板を掲げたこともなかつた。私は他人と争うことの多い人間と思う人もいるようだが、それはまつたくの間違である。私は四十年に及ぶ勤務大学で教授たちの誰とも争つたことはない。大いなる敵を見つづけるためには、小さな敵を持たないこと、これがモットーである。

私は両親から愛された人間である。こと

は母の愛は大きい。小学校の先生からも愛されたほうで、今でも一人の恩師との交流

がつづいている。中学、高校、大学と年を

とるにつれて、教師は私を愛さなくなつた。

私の文業を最も育てくれたのは文芸誌

『新潮』である。

私の仕事には未完結のものがかなりある。まだ人生は終わらない。今後の仕事の計画表をある編集者に見せたら、先生は二百歳まで生きるつもりですかと揶揄された。

推薦のことば

上智大学特任教授
東北大学元総長
首都大学東京前学長
西澤潤一

京都大学名誉教授
立命館大学白川静記念
東洋文字文化研究所長
加地伸行

京都大学名誉教授
関西大学教授
竹内洋

ノンフィクション作家
工藤美代子

私の学生時代には哲学は高嶺の花であった。学習意欲はあるが実際はとても難解であり、理想と現実の矛盾に困惑したものだった。それでも先生方から容赦なく論破されつづ顔面蒼白になるほど哲学を指導されたことは大きな財産となつた。私の科学者としての行き方を決定づけた大事な本にニーチェの「ツアラトゥストラ」がある。

西尾幹一氏は私の往事の先生方と同様に論理の展開は妥協がなく、深く、甚だ鋭い。そして何よりも批判精神が旺盛である。この批判ということがないと科学の発明は覚束ない。西尾先生の「ニーチェ」にも強い感銘を受けたが、中教審委員時代の先生の教育論暗記に頼る画一的学習、大学の序列化への批判には私も同じ意見で大いに共鳴した。その

西尾先生は私の往事の先生方と同様に論理の展開は妥協がなく、深く、甚だ鋭い。そして何よりも批判精神が旺盛である。この批判ということがないと科学の発明は覚束ない。西尾先生の「ニーチェ」にも強い感銘を受けたが、中教審委員時代の先生の教育論暗記に頼る画一的学習、大学の序列化への批判には私も同じ意見で大いに共鳴した。その

西尾幹一氏は多作である。全集全十二巻もの刊行が可能な著述家は、現在、ほとんどいない。一方、著述のみではないが、多方面にわたて常になにか発言するコメンテーターなる評論家がいる。

一見、両者は同じように見えるが、決定的に異なる。コメンテーターは依頼者の意向やその場の雰囲気に合わせて反対あるいは賛成するので、以前の発言と矛盾した発言をして平気だ。世に迎合する者の常である。ところが、西尾氏は異なる。すぐれた学問的業績があり、それに基づいた確乎とした保守思想を有し、その一定した立場から発言するので、いかなる方面に対しても的確な見解を出し得、かつその内容に矛盾がない。不動にして一貫した姿勢、これは思想家であればこそ為しうることである。

西尾幹一氏は太陽である。太陽として輝いている。群小のコメンテーターは、太陽系周辺の星屑みたいなものである。太陽と星屑と——勝負は初めからついている。

全共闘運動だけなわのころ、私はしがない院生だったが、キャンパスのいい氣な革命こうこには違和感があった。西尾先生の一巻のあと『三島由紀夫』の解説や『ヨーロッパ像の転換』を読み、深く心を打たれ、それから愛読者となつた。そんな経験はわたしだけではなかつた。後年、別の大学院にいた友人と雑談をしたときに、かれもまたキャンパスの革

新幻想に違和感をもち、西尾先生の本を愛読したことを聞いた。ある教育長からも反体制教育の嵐の中で、自分を保つために、西尾先生の教育論をよそがとしと聞いた。つい最近までの大学キャンパスや論壇は、猫も杓子も反体制だったが、知識人の世界では反体制こそが体制だったからである。先生は、いささかもふれず「保守」という反体制」のス

西尾さんご自身は率直な方だが、文章には美しい毒が潜んでいて、礼節をわきまえていながら、筋の通らない言動に対しても猛烈な批評精神をもつて戦う。いわば言葉の戦士だ。

西尾さんご自身は率直な方だが、文章には美しい毒が潜んでいて、礼節をわきまえていながら、筋の通らない言動に対しても猛烈な批評精神をもつて戦う。いわば言葉の戦士だ。

西尾さんご自身は率直な方だが、文章には美しい毒が潜んでいて、礼節をわきまえていながら、筋の通らない言動に対しても猛烈な批評精神をもつて戦う。いわば言葉の戦士だ。

西尾さんご自身は率直な方だが、文章には美しい毒が潜んでいて、礼節をわきまえていながら、筋の通らない言動に対しても猛烈な批評精神をもつて戦う。いわば言葉の戦士だ。

『西尾幹一全集』全巻内容

第一巻 ヨーロッパの個人主義

ISBN978-4-336-05380-0

I

ヨーロッパ像の転換

「西洋化」への疑問／ドイツ風の秩序感覚／西洋的自我のパラドックス／廃墟の美／都市とイタリア人／庭園空間にみる文化の型／ミュンヘンの舞台芸術／ヨーロッパ不平等論／内なる西洋外なる西洋／「留学生」の文明論的位置／オリンポスの神々／ヨーロッパ背理の世界／「西洋化」の宿命

II

ヨーロッパの個人主義

一 進歩とニヒリズム—封建道徳ははたして悪か／平等思想ははたして善か／日本人にとって「西洋の没落」とはなにか

二 個人と社会—西洋への新しい姿勢／日本人と西洋人の生き方の接点／自分自身を見つめるための複眼／西洋社会における「個人」の位置／日本社会の慢性的混乱の真因／西欧個人主義とキリスト教

三 自由と秩序—個人意識と近代国家の理念／東アジア文明圏のなかの日本／人は自由という思想に耐えられるか

四 日本人と自我—日本人特有の「個」とは／現代の知性について
掌篇

留学生活から フーズムの宿／クリスマスの孤独／ファッショングの仮装舞踏

会／ヨーロッパの老人たち／教会税と信仰について

ドイツの悲劇 確信をうしなった国／東ドイツで会った人々

ヨーロッパ放浪 ヨーロッパを探す日本人／ミラノの墓地／イベリア半島／アムステルダムの様式美、ほか

第二巻 悲劇人の姿勢

ISBN978-4-336-05381-7

I

悲劇人の姿勢

アフォリズムの美学／小林秀雄／福田恒存／ニーチェと学問／ニーチェの言

語観／論争と言語／政治と文学の状況／文学の宿命—現代日本文学にみる終末意識／「死」から見た三島美学／不自由への情熱—三島文学の孤独

II 続篇

行為する思索—小林秀雄再論／福田恒存小論四題／高井有一さんの福田恒存論／三島由紀夫『宴のあと』『裸体と衣裳』／竹山道雄『時流に反して』『ビルマの堅琴』／田中美知太郎先生の思い出

III 「素心」の思想家・福田恒存の哲学

知識人の政治的言動について

二 「和魂」と「洋魂」の戦い

三 ロレンスとキリスト教

四 「生ぬるい保守」の時代

五 エピゴーネンからの離反劇

六 「眞の自由」について

IV 三島由紀夫の死と私

一 三島事件の時代背景

二 一九七〇年前後の証言から

三 芸術と実生活の問題

四 私小説的風土克服という流れの中で再考する

V 豪国忌 没後四十年

〔1〕島由紀夫の自決と日本の核武装

追補 福田恒存・西尾幹一対談「支配欲と権力欲への視角」

第三巻 懐疑の精神

ISBN978-4-336-05382-4

I

二十代ドイツ留学前

一夢想家の文明批評（堀田善衛批判）／「雙面神」脱退の記（新潮）／私の「戦後」観（自由新人賞）／国家否定のあとにくらむ

の（文藝春秋）／私のうけた戦後教育（自由、大江健三郎への疑問）／知性過信の弊（筑摩現代日本思想大系『反近代の思想』月報）／保守主義（講談社現代新書『現代思想事典』の項）、ほか

II 大学紛争と青年の反乱の時代に抗して（ドイツからの帰国直後）

國鉄と大学／文化の原理 政治の原理／ことばの恐ろしさ／見物人の知性／紙製の蝶々／自由という悪魔／大学知識人よ、幻想のなかへ逆もどりするな、ほか

III 情熱を喪った光景 一九七〇年代の総括／老成した時代／富と幸福をめぐる一考察／古典のなかの現代／権利主張の表と裏／言葉を消毒する風潮／日本主義——この自信と不安の表現、ほか

IV 政治主義の嵐のなかで 状況の責任か個人の責任か——ハンナ・アレント「イエルサレムのアイヒマン」／ソルジエニーツインの国外追放、西側批判／韓非子を読む毛沢東／小国はつねに正義か——小田実を笑う

V 観客の名において——私の演劇時評

VI 比較文学・比較文化への疑問 東大比較文学研究室シンポジウム発言（司会・芳賀徹氏）／東工大比較文化研究室シンポジウム発言（司会・江藤淳氏）

追補 今道友信・西尾幹二対談「比較研究の陥穀」

第四卷 ニーチェ

ISBN978-4-336-05383-1



西尾幹二略歴

昭和十年（一九三五）七月二十日東京生。昭和二十九年（一九五四）都立小石川高校卒。同三十三年（一九五八）東京大学文学部ドイツ文学科卒。同大学院文学修士、文学博士（初期のニーチェ）。昭和三十六年（一九六一）から静岡大学講師となる。現在に至る。

本目録最終頁参照

第五卷 光と断崖——最晩年のニーチェ

ISBN978-4-336-05384-8

第六卷 ショーベンハウナーの思想と人間像 ISBN978-4-336-05385-5

I ショーベンハウナーの思想と人間像

一 ショーベンハウナーの虚像をめぐつて

II ショーベンハウナーの父と母

III 『意志と表象としての世界』の背景

IV 西欧におけるインド把握の原型

V 晩年のショーベンハウナー

六 神秘主義に憧れた非神秘家

II 関係論文 インド像の衝突——ショーベンハウナーと明治の知性／富永伸基の仏典批判とショーベンハウナー／侮蔑者の知恵——ショーベンハウナーと

第一部

序論 日本と西欧におけるニーチェ像の変遷史

第一章 最初の創造的表現

第二章 多様な現実との接觸

第二部

第一章 自己抑制と自己修練

第二章 新しい飛躍への胎動

第三章 本源からの問い

第四章 理想への疾走

国家／ニヒリズムとしてのドイツ思想の展開－カントからニーチェまで／ヨーロッパにおける歴史主義と反歴史主義／北方的ロマン性－ドイツ的根源性の原型／無心への飛躍－ユング、小林秀雄、唐木順三、オイゲン・ヘリゲル、ニーチエ

III ニーチエとの対話－ツアラトウストラ私評

友情について／孤独について／現代について／教育について／高貴さについて／学問について／言葉について

IV 私の翻訳論

哲学を哲学たらしめよ／『意志と表象としての世界』西尾幹二訳（抄）

第七卷 ソ連知識人との対話

ISBN978-4-336-05386-2

I ソ連知識人との対話

- 第一章 トルストイの墓
- 第二章 一女流詩人と会談
- 第三章 フィクションとしての國家
- 第四章 中央アジアに見る国字改革
- 第五章 コーカサスの麓にて
- 第六章 ロシア喜劇の登場人物たち
- 第七章 愚直な愛国心
- 第八章 道徳的な、あまりに道徳的な
- 第九章 ソ連に「個」の危機は存在するか
- 第十章 世紀末を知らなかつた国
- 第十一章 競争をあおる平等社会
- 第十二章 メシア待望



ソ連作家同盟本部前にて

第八卷 日本の教育 ドイツの教育

ISBN978-4-336-05387-9

I 「日本の教育 ドイツの教育」を書く

前に私が教育について考えてしたこと

わが父への感謝／教師は評点を恐れるな／競争回避の智恵と矛盾

II 『日本の教育 ドイツの教育』

一 ドイツの教育改革論議の渦中に立たされて

二 教育は万能の女神か

三 フンボルト的「孤独と自由」の行方

四 大学都市テューリンゲンで考えたこと

五 世界的視座で見た江戸時代以降の教育

六 進学競争の病理

七 日本の「学歴社会」は曲がり角にあるか

八 個人主義不在の風土と日本人の能力観

九 精神のエリートを志す人のために

III 臨教審批判

III 放射線（東京新聞・夕刊）

日本語と話し言葉／無法社会／学校と階級社会／保守停滞の兆し／貧富の比較／人間の卑小化／島国の内と外／官僚的非効率／開放性と閉鎖性／人生目的の混乱／経済の奥にあるもの／国境について、ほか

IV 直言（産経新聞）

歴史家の眼／マンショーンの名称／日本人の長所は弱点／文化の輸出／中国からの留学生／実践家の方法／マンガと大学生／親しさに溺れるなれ／壁新聞という謎、ほか

V ドイツ再訪

ベルリンの「古い家」と「新しい家」／マスルンカ夫人の一日／仮面の下の傲慢／祖国をなくした老人／ミュンヘンで観た「ニーベルングの指環」／人口増加に無力なヒューマニズム／私もイスス嫌い／日本女性のセンス／ドイツの家／ドイツの大学教授銓衡法／技術觀の比較－日本とドイツ

ず—臨教審よ常識に還れ／なぜ第一次答申は無内容に終わったか

IV 第十四期中教審委員として

講演、日本の教育の平等と効率／西原春夫前早大総長への公開質問状／有馬朗人前東大学長への公開質問状

V 「教育と自由」

一 中教審委員「懺悔録」—指導者なき国で理想の指導者像は描けず／「教育改革」論議はなぜ人を白けさせるのか／答申から消された文部省批判

二 自由の修正と自由の回復—「格差」と「序列」で身動きできない日本の学校／文部省文書のスタイルを破る／公立学校と私立学校の宿命的対比／入学者選抜は「大学の自治」か／なぜ地獄の入口に蓋をするのか

三 すべての鍵を握る大学改革—混沌たる自由の嵐を引き起こすために／私の具体的な大学改革案／「競争の精神」を忘れた日本の学問

終章—競争はすでに最初に終了している／誰にでも開かれているべき眞の自由／効率から創造へ

第九卷 文学評論

ISBN978-4-336-05388-6

I 古典と現代

日本人と時間／『平家物語』の世界／『徒然草』断章形式の意味するもの／人生批評としての戯作／新戯作派と江戸文学／シェイクスピアの現代化—批評としての演出／ゲーテとHumaniora の一面／汝自身を知れ

II 文学の現在

批評の二重性／現代小説の問題（付・二葉亭四迷論）／日常の抽象性—開高健『夏の闇』をめぐつて／現在の小説家の位置／大岡昇平全集の刊行にふれて／土俗的歴史ブーム／平野謙と批評家の生き方／『近代文学』について／わたしの理想とする国語教科書／老成と潔癖—現代小説を読む／「敗戦」像の発見—明るい自由な時代の「不安の文学」／小川国夫／柏原兵三／高井有一／上田三四二／綱淵謙錠／石原慎太郎

III 文藝時評（共同通信）抄

辻井喬『暗夜遍歴』／高井有一『塵の都に』／野坂昭如『赫奕たる逆光』／

V 文学の周辺

知恵の凋落／成り立たなくなつた反語精神／愚かさの偉大さ—『乱』と『リア王』／教養の無力を知つた時代／大いなる虚榮心／空漠たる青年たち／トナカイの置物—加賀乙彦とソ連の旅

第十卷 ヨーロッパとの対決

ISBN978-4-336-05389-3

I 論争の精神

読書する怠け者／繭につつまれた旅—河上徹太郎『西欧暮色』にふれて／横光利一『旅愁』再考／観念の見取図—丸谷才一『たつた一人の反乱』と山崎正和『鷗外鬪う家長』／漱石の文明論と現代—平川祐弘氏へ／複眼の欠如／西洋の見方過去の見方—高橋英夫氏へ／ギュンター・グラスと大江健三郎の錯覚／ノーベル賞と文化勲章／西欧に屈した姿勢—大江健三郎のストックホルム講演／当節言論人の「自己」不在—猪口邦子氏と大沼保昭氏と／日本を米国型「多民族国家」にするな—石川好君、皮膚感覺で語る勿れ

II ヨーロッパの閉鎖性

Die Exklusivität Europas（バイエルン第二放送 付・邦訳）

III 外務省主催西ドイツ八都市周遊講演

近代日本とは何か（講演録）／ドイツで私の講演がぶつかつた壁／拒否される自画像／身構える西欧的自尊心—日欧文化摩擦異聞

IV パリ国際円卓会議

日本の台頭はどうのように解釈るべきか（ポジションペーパー）／西欧の自閉／日本の無力

V 「国際化」を疑う

西欧の無知／日本の怠惰／愚かなり「日本特殊論」／西ドイツから見た日本／ロンドンで考えたこと／「国際化」は「歐米化」にあらず／「国際化」と

八木義徳『遠い地平』／黒井千次『たまらん坂』／吉本ばなな『うたかたサンクチュアリ』／安岡章太郎『私の昭和史』／色川武大『狂人日記』／中野孝次『夜の電話』／村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』／阿部昭、坂上弘の旧作連作／江藤淳『一族再会』／江藤淳『自由と禁忌』、ほか

は米国への適応なのか／「西ドイツに見習え論」のウソ／欧米人が描く日本像の奥底にあるもの／日本型資本主義は存在するか／変化したヨーロッパの位置と日本の学問／『日本の友』シユミット前西独首相に反問する／論争はすべからく相手の「神」を撃て！

第十一卷 自由の悲劇

ISBN978-4-336-05390-9

I 戰略的「鎖国」論

- 一 「開国」政策の中の「鎖国」
- 二 コメ、クジラ、自動車、文化
- 三 必要とされる「欧米の国際化」
- 四 食糧安全保障論
- 五 世界の日本弱体化政策に抗して
- 六 「人の自由化」は悲劇的錯誤

II 「労働鎖国」のすすめ

労働者受け入れはヒューマニズムにならない／世界は「鎖国」に向かつてい／世界史から見た日本の政界再編／世界の流れは近代以前へ戻りつつある／あらためて民族主義を必要としない日本／天皇訪中に反対する／ベーカー演説「欧・大西洋機構」を批判する／「大欧州」の出現に疑問

V 棒立ちする日本

湾岸戦争で試される日本／保革ねじれ現象の国民的不幸／政治家の顔／細川政権は「共産主義崩壊」を知らない／侵略戦争謝罪発言／北朝鮮の核脅威は日本の国内問題／いざれ来る北の脅威との共存、ほか

他者としてのアメリカ／危険な重荷——日米構造協議の行方／複眼で見るべき米国觀／外国の正義と善意に日本はどう対応すべきか
II 共産主義敗退のドラマ

歴史の失敗と思想の失敗／ゴルバチョフが鄧小平になる日／ロシア革命、この大いなるムダの罪と罰／進歩と抑圧が同義語の国／対ソ金融支援問題とドイツ／ベルリンの壁崩壊に思う／統一ドイツの十字架／一九九一年八月ソ連共産党の敗退／「統一ドイツ」の行方——ドイツの対日悪意

III 冷戦崩壊直後の世界の姿

確信の喪失／日本型「国際化」の誤解／統一ドイツの運命が暗示する地球の未来／日本の宿命を知る

IV 立ちすくむ日本

フランス革命観の訂正／侃侃諤謗、フランスの「自由」！／アジアへの幻想を排す／国家意志不在・日本の不安／学生気質の変貌

第十三卷 全体主義の呪い

ISBN978-4-336-05392-3

I 全体主義の呪い

前編 罪と罰

- 一 プラハのサロン「黒い馬」にて
- 二 国立哲学研究所でのディベート
- 三 「地下出版物」編集者の確信
- 四 個人の責任はどこまで問えるか
- 五 恐怖の遺産
- 六 ドイツ—魔女狩りのページェント
- 七 人間の罪は区別できるか

第十二卷 日本の孤独

I ソ連に勝ったアメリカ

ISBN978-4-336-05391-6



プラハの国立哲学研究所にて

八 ワルシャワの自由の誇り

九 埋められぬ断層

十 病者の特権

終章 鳴呼いざこに行く薄明の未来

II 異なる悲劇

日本とドイツ

ヴァイツゼッカー前ドイツ大統領謝罪演説の欺瞞／英米からみた日本の謝罪問題／『異なる悲劇 日本とドイツ』がもたらした政治効果とマスコミへの影響

III 同時代の問題

オウム真理教と現代文明／「政教分離」とは何か／コリオレイナスの怒り（阪神大震災と自衛隊）／韓非子の教訓／オウムを生んだ日本人の精神的不用意／なぜ論じぬ、信者の道徳的責任／吉本隆明氏の「擁護論」に苦言を呈す／破防法の法的不備—ドイツの緊急事態法に学ぶべし、ほか

第十四卷 人生の価値について

ISBN978-4-336-05393-0

I 人生の深淵について

怒りについて／虚栄について／孤独について／退屈について／羞恥について／嘘について／死について／教養について／苦悩について／權力欲について

II 人生の価値について

無知の権利／自分への幻想／褒められること／成功と失敗／人生の評価／真贋について／虚飾について／自由と混沌／独創性について／芸術と個人／自由と平等／自由と競争／自由の隠し場所／福音について／理解について／行為と言葉／思想ということ／書物の運命（中略）宿命について／取り戻せない過去／希望について／ある体験（一）～（五）／自分の知らない自分／死の統御について／死の自覚について／自覚の限界について／病気の診断について／人生の長さについて／人生の退屈そして不安／断念について

III 男子、一生の問題

「男子の仕事」で一番大事となるものは何か／時間に追われず、時間を追いかけて生きよ／この国の問題—羞恥心の消滅／「地図のない時代」にいかに地図を見つけるか／男同士の闘争ということ／軽蔑すべき人間、尊敬すべき

第十五卷 わたしの昭和史

ISBN978-4-336-05394-7

I わたしの昭和史 少年篇 1

遠い日の幻影／二つの夏休み／疎開まで／特攻隊志願の夢／空襲／コンパスの占い／終戦／感情のどこおり／夜明け／「僕は猫の『クリ』である」／農地改革／あらし／師範付属中学校／対決／偉人論争／社会科

II わたしの昭和史 少年篇 2

白い帽子／文部省教科書「民主主義」／遊戯と学習／挫折した小説「留やんとKさん」／反逆児／十四歳の懷疑／マッカーサーの日本／アメリカニズム／東京帰還／朝鮮戦争勃発／日本人が思い出せない二十世紀の正午／戦後日本の原型／高校受験／群像／初恋／メランコリー

III わたしの昭和史 少年篇 3（予定）



人間／「自分がいないような」読書はするな／仕事を離れた自由な時間に

第十六巻 歴史を裁く愚かさ

ISBN978-4-336-05395-4

I 教科書問題を考える前提

歴史のわからない歴史教科書／司馬遼太郎史観への疑問／歴史は民族によつて異なつて不思議はない／新しい歴史教科書の戦い／新しい歴史教科書の創造

II 慰安婦問題の国際的不公平

ドイツの傲岸、日本の能天氣／ついに証明された日韓政治決着の悪質さ、ほか

III 展開

歴史の矛盾／文部省、約束を守つて下さい／壳国官房外務省の教科書検定、不合格工作事件／われわれの目ざしたのは常識の確立にすぎない／「新しい歴史教科書」採択包围網の正体／平和のままのファシズム／日韓の歴史共同研究は可能か

IV その後

愛國者の死（坂本多加雄追悼）／学者とイデオロギー／林健太郎先生のご逝去／公立図書館の焚書事件（一）地裁で敗訴（二）最高裁で勝訴／受験生が裁判所に訴え出た大学入試センター試験／歴史教科書問題は決して終わっていない

第十七巻 沈黙する歴史

ISBN978-4-336-05396-1

I 日本人の自尊心の試練の物語

歴史に学べば自己は改められるのか／日本の戦争が愚行か否かは百年経なければ分からぬ／不可解な十九・二十世紀前半の世界／米国は日本攻略を策定していた／一度指した駒は元に戻らない／日本人は運命の振り子を果たして自ら動かせたか

II 沈黙する歴史

戦争には敗者にも言い分がある／近代戦争史における「日本の孤独」／限定戦争と全体戦争／「不服従」の底流／日米を超えた歴史観／「青い山脈」再考／日本のルサンチマン／「二十世紀の戦争の解釈が二十一世紀の国益を分け」／西洋の「内戦」に巻き込まれたアジア／西洋文明に立ち向かった「理念の戦争」、ほか

第十八巻 決定版 国民の歴史

ISBN978-4-336-05397-8

I 「国民の歴史」は内容目次の紹介を略します。

「決定版」としての追加分は、まえがき「歴史とは何か」／付論（自画像を描けない日本人／付論）／『国民の歴史』という本の歴史／参考文献一覧、です。

第十九巻 日本の根本問題

ISBN978-4-336-05398-5

I 歴史と自然

縄文土器が語りかけるもの／近代史は「夜」を地上から追い払った／歪みの中に美を見つける感性／森の生態系の中で熟成した自然観／草原の時代から森の時代へ／日本特性の淵源／近代的世紀史の方程式は砂漠の民の物指しにすぎない／インドの叡智に魅了された「森の住人」たち／古代日本人の靈魂観／原罪としての自然科学

II 歴史と科学

科学と「人間的あいまいさ」の関係／『国民の歴史』は旧石器捏造事件を予言していた／ミトコンドリアDNA鑑定と人間の歴史／科学は発展したが「真理」からは遠ざかつた／ガリレオ＝デカルトの二元論／死んだ時間と私の時間／科学は歴史に対して無力である／古代史のあつかい方への疑問

III 言語と神話

危機に立つ神話／皇室と日本人の教養／本居宣長の問い／明治初期の日本語と現代における「言文不一致」／漢字と日本語－わが小林秀雄／森首相「神

第十六巻 歴史を裁く愚かさ

ISBN978-4-336-05395-4

世界大戦を悲劇的にしたリンカーンの正義の理念／オレンジ計画について／歴史と外交を峻別せよ／焚書、このG.H.Qの思想的犯罪／全千島列島が日本領／米国霸權が揺らぐとき「東京裁判史観」は崩壊する／今こそ「昭和史」論者と戦おう

の国」発言について／大陸とは無縁の列島文明、ほか

IV 憲法その他

日本國憲法 前文私案／參議院憲法調査会における参考人としての意見陳述全文／このまま改正されれば「化け猫」が出てくる／戦争さえなければ何でもありが許される「奴隸の平和」は最後に戦争になる／やがて日本は「香港化」する／日本の国防を内向きにしているのは憲法が原因ではない／朝鮮は日本とはまったく異なる宗教社会／韓国人はガリバーの小人／「月刊朝鮮」編集長・趙甲済氏への質問／わたしの台湾紀行、ほか

第二十卷 江戸のダイナミズム

ISBN978-4-336-05399-2

第一部 前提編／暗い江戸、明るい江戸／初期儒学者が見据えた「中華」の「華」はわが日本／日・中・欧の言語文化ルネサンス／古代文献学の誕生／一焚書坑儒と海中に没した巨大図書館／ホメロスとゲーテと近代ドイツ文献学／探しあぐねる古代聖人の実像／清朝考証学・管見／三段の法則／「価値」から「没価値」を経て「破壊と創造」／世界に先駆ける富永仲基の聖典批判

第二部 展開編／本居宣長が言挙げした日本人のおおらかな魂／宣長と徂徠

の古代像は「私」に満ちていたか／宣長とニーチェにおける「自然」／中国神話世界への異なる姿勢／新井白石と荻生徂徠／科挙と赤穂浪士／十七世紀西洋の孔子像にクロスした伊藤仁齋／西洋古典文献学と契沖『萬葉代匠記』／万葉仮名・藤原定家・契沖・現代かなづかい／音だけの言語世界から誕生した『古事記』／「信仰」としての太陽神話／転回点としての孔子とソクラテス

第二十一卷 危機に立つ保守

ISBN978-4-336-05400-5

I ニューヨーク同時多発テロ

保守思想の一部の左翼返り／立花隆氏なら仕方がないが西部邁氏よ、おおブルータス、お前もか！／イスラムテロに真珠湾と特攻隊を重ね合わせるな／臆病者の「思想」を排す／小林よしのりを論ず

II 保守とは何か

生き方としての保守／何が真贋か／自由の涯には破壊しかない／他人の運命にも国家にも無関心なあぶない宰相／ハイジャックされた漂流國家／小泉訪朝以降の観察記／アメリカへの複眼／ライブドア騒動の役者たち／第四次世界大戦に踏みこんだアメリカ／言論人は政局評論家になるな／安倍晋三氏よ、「小泉」にならないで欲しい／「保守」を勘違いしていないか／日本は米中に厄介で面倒な国になれ／米大統領への首相の慰安婦謝罪はやがて国難を招く／「教育再生会議」無用論／「教育再生会議」有害論、ほか

III 皇室の苦悩

皇太子さまへ敢えて御忠言申し上げます／根底にあるのは日本人の宗教觀／天皇は国民共同体の中心／昭和天皇と日本の歴史の連續性／皇位継承問題を考える／「かのように」の哲学／が示す知恵／権力不在の国日本と天皇 IV 自由民主党の罪と罰／経済と政治は一体である／日米軍事同盟と米中経済同盟の衝突／本来中国は「鎖国」文明である／金融カオスの起源／金融は軍事以上の軍事なり／中国の「アメリカ化」、アメリカの「中国化」／日本をここまで壊したのは誰か／EU幻想と東アジア共同体幻想／トヨタ・バッジングの教訓／「経済大国」といわなくなつた）とについて／雑誌ジャーナリズムよ、衰退の根源を直視せよ、ほか

第二十二卷 戰争史観の革新

ISBN978-4-336-05401-2

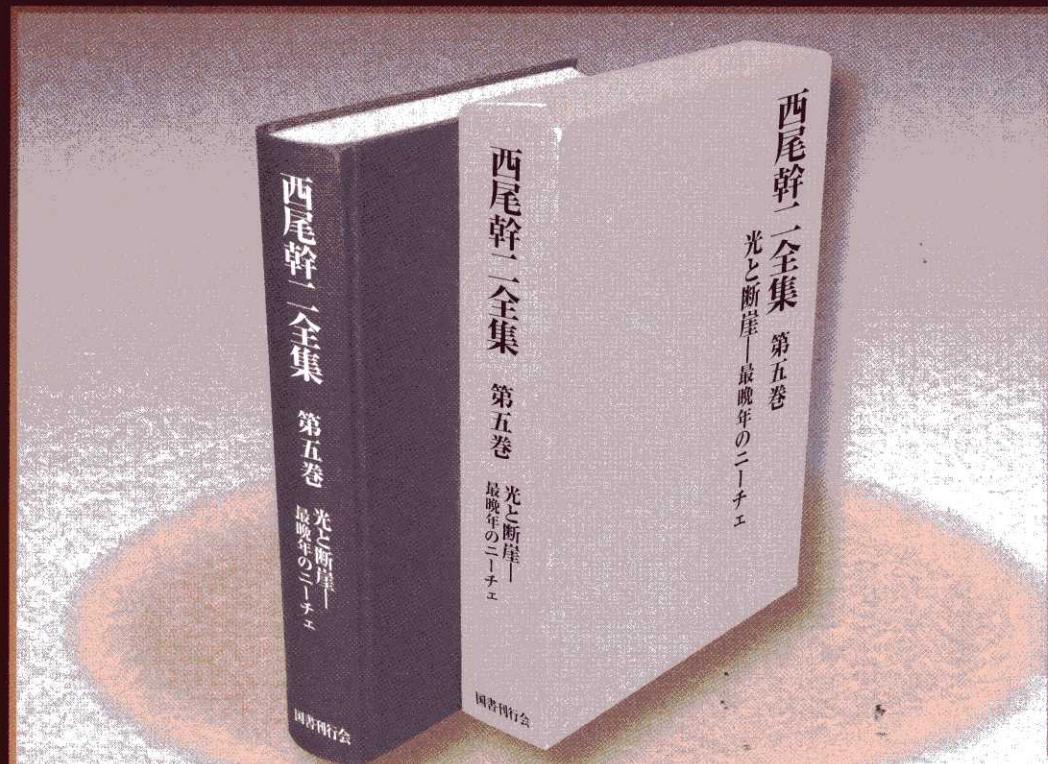
アメリカに封印されている日本の戦後

このまま戦後百年が来てよいのか／「GHQ焚書図書開封」第一～十二巻より／天皇と原爆（二〇一一年刊行予定）／世界史のなかの大東亜戦争（企画中）／昭和のダイナミズム（企画中）

●編集内容・巻構成については変更の可能性があります。あらかじめ了承願います。

西尾幹二全集(全22巻)

第二回配本第1巻 以降、巻数順に年4冊配本予定
A5判・上製・貼函入・各巻平均450~700頁・本文組13級
2段組・予価各巻5800~8000円



第一回配本 平成二十三年十月 刊行予定

第五巻『光と断崖—最晩年のニーチェ』

発狂直前のニーチェ像を立体化し
未刊行の「西尾のニーチェ」を集成する

定価：本体五八〇〇円+税

ISBN978-4-336-05384-8

I 最晩年のニーチェ

光と断崖／幻としての『権力への意志』／ニーチェ『この人を見よ』西尾幹二訳／著作を「作る」いとを排した決定版ニーチェ全集の出現——イタリア人学者の実証について／Zweifel über die Authentizität des neu ersetzen Abschnittes im „Ecce homo“ der kritischen Gesamtausgabe

II ドイツにおける同時代人のニーチェ像

III 日本におけるこの九十年の研究の展開

IV 掌篇

研究余滴 人間ニーチェをつかまえる／高校教師としてのニーチェ／手製の海賊版／ニーチェ＝ローデ往復書簡集／「星の友情」の出典／「バーゼル大学教会史講座をめぐる応答戯れ歌」由来／裏面史の一こま——ボン大学紛争

ニーチェと学問 私にとっての一冊の本——

『悲劇の誕生』／フロイトとニーチェの出発点／アポロ像の謎／「古典文献学」といういとばの使われ方／「教養批判」の背景
方法的態度 ニーチェと現代／実験と仮面——ゲーテとの相違／批評の悲劇——ニーチェとワーグナーの一断面／ニーチェのベートー・ヴィエン像／自己欺瞞としてのデカダンス／言葉と存在との出会い／和辻哲郎とニーチェ

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15 Tel. 03-5970-7421 Fax. 03-5970-7427 http://www.kokusho.co.jp e-mail: sales@kokusho.co.jp

帖合・書店印

国書刊行会『西尾幹二全集』[全22巻]を

部申し込みます。

お名前

〒

ご住所

お電話

※ 必要事項をご記入のうえ、書店へお渡しください。

申込書